

紀要

第 7 号

目 次

二つの前方後円墳(細川修平)… 1
滋賀県出土の埴輪資料集(その4)(稻垣正宏)… 27
近江へのアプローチ・その1 43
1. 高島郡の地形と条里(神保忠宏)… 44
2. 高島郡における遺跡の動態 一今津町周辺をフィールドに一	…(畠中英二)… 50
3. 高島郡の古代寺院(重岡卓)… 57
4. 高島郡の鉄生産とその周辺(大道和人)… 61
5. 高島郡の古代北陸道(内田保之)… 66
6. 高島郡にみる古代国家(細川修平)… 71
南北方位建物についての研究ノート(田井中洋介)… 77
近江京域論の再検討・予察—7世紀における近江南部地域の諸相一	…(相原嘉之)… 83
滋賀県における古代の土器様相・その1	
—湖南地域における無台杯身・かえり付き蓋の変遷を中心に一	…(畠中英二)… 104
江州農具雜想ノート(上垣幸徳)… 126
滋賀県甲賀郡土山町における藏王産花崗岩製中世石造美術の分布	
—土山町石造美術石材分布調査概要—(兼康保明)… 131
滋賀県内出土漆製品集成—後編—(中川正人)… 145

1994. 3

財團滋賀県文化財保護協会
法人

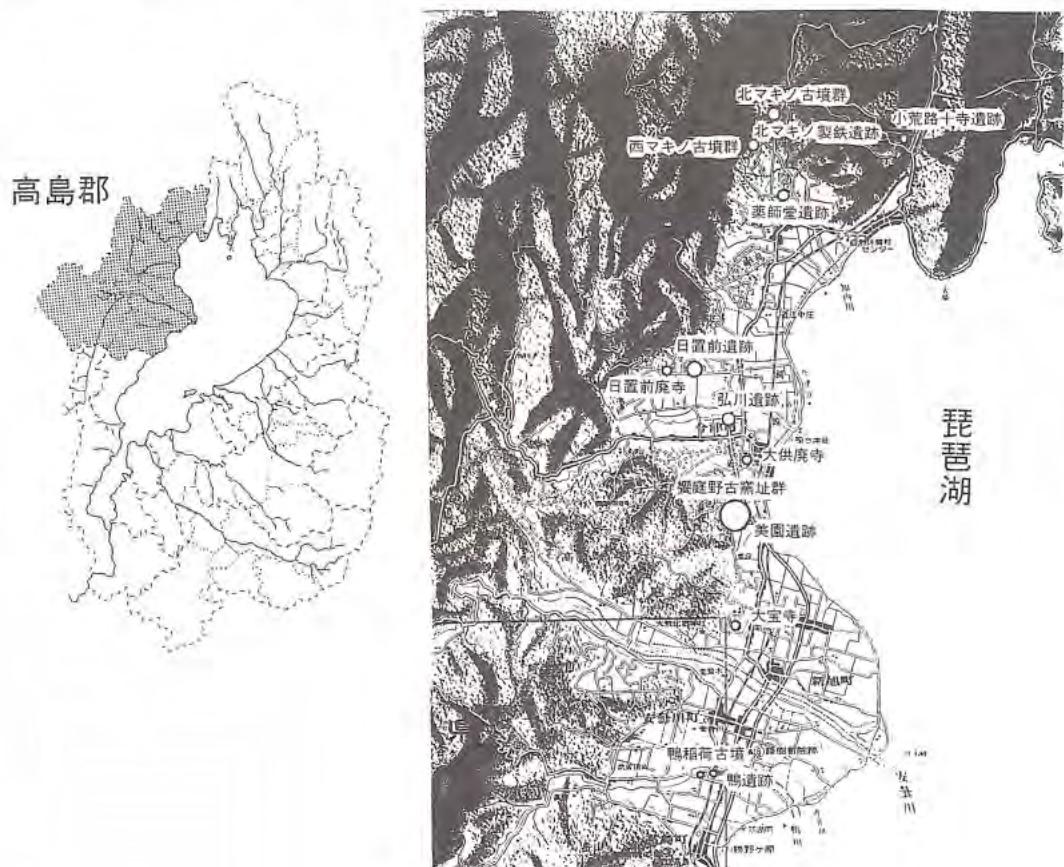
近江へのアプローチ・その1

はじめに

近年、発掘調査によってもたらさせる資料数は極めて膨大で、個々の資料そのものが持つ問題点も多岐にわたり枚挙に暇がない。考古資料を中心に用いた一地域史の叙述は極めて困難な作業であるといえる。小稿は「近江」を中心とする地域研究という日暮れて道遠いこの作業を、財団法人滋賀県文化財保護協会の有志による共同研究を行い、少しでも前進させようという試みである。

今回は、滋賀県北西部に位置する高島郡の地域史について、古代を中心とする時代の地形と条里、古代道の復元、遺跡の立地の特性、瓦の動向、手工業生産(鉄生産)、古墳時代から古代にかけての国家との関わりについてふれることとした。

これらのアプローチで全ての問題についてふれているとはいえないが、地域研究の一助となることを願うものである。また、個々の論考については諸兄姉からの御教示、御批判を賜りたい。



今回ふれる主な遺跡

2. 高島郡における遺跡の動態

—今津町内周辺をフィールドに—

畠 中 英 二

ここでは、現時点において発掘・試掘・分布調査で知られる高島郡内の遺跡の分布状況とその内容について概観し、本稿で問題とする古代という時代についてアプローチを試みたい。しかし、高島郡全域に万遍なく調査が行われていないことから郡内で比較的調査例の多い今津町を検討の対象にしほりたい。また、遺跡の調査例への考古学的アプローチについては多くの制限をもって行わざるを得ない点があることから⁽¹⁾、通史的に見ることのできる遺跡の立地の問題についてのみを取り扱いたい。以下、各時代毎に集落・生産に分けて遺跡立地の特性を中心にふれることとする。

1. 集落遺跡の立地の変遷

今津町内では現時点で知り得る限りの遺跡の存在から人間の生活の痕跡をおぼろげながらトレースすることが出来るのだが、ここでは巨視的に土地条件による遺跡の立地についてふれてみたい。

縄文時代の遺構は段丘上に立地する弘部野遺跡⁽²⁾、上弘部遺跡⁽³⁾、弘川遺跡⁽⁴⁾や、沖積地に立地する北仰西海道遺跡⁽⁵⁾等で検出されており立地については多様である。また、扇状地上に立地する日置前遺跡⁽⁶⁾で検出された落とし穴状遺構については、妙見山丘陵の西側の後背湿地をとりまくように存在することができ非常に興味深いものである。

多様な立地を示す縄文時代の遺構とは異なり、弥生・古墳時代の遺構は石田川左岸地域では北仰西海道遺跡⁽⁷⁾、福岡地区の遺跡群⁽⁸⁾、石田川右岸では弘川地区の遺跡群⁽⁹⁾など何れも沖積地に立地していることが指摘できる。小竹森直子氏によると滋賀県下における弥生時代の遺跡の立地は、平野下位部の三角州などを中心に面的に広がるのに対し、平野の上位部にあたる扇状地や河岸段丘上では一部流域沿いのみで面的な広がりは見られない。面的な広がりを持つものとして守山市周辺は野州川のデルタ地帯に、能登川町周辺は埋没内湖の低湿地帯に立地しており、一方、点的な分布をみせるものは扇状地端部の湧水地帯や河岸段丘の低位部、浜堤背後の湿地帯に限られるという⁽¹⁰⁾。小竹森氏が指摘された以上の傾向は今津町内の傾向をも含んでいると見られ、弥生時代以降の遺跡の立地の特性が極めて水利を中心とする土地条件に左右されているといえる。

古墳時代以降の動きとしては、石田川右岸地域の沖積地に位置する弘川地区の遺跡群⁽¹¹⁾は以降多少の場を変えながらも安定した様相を呈している一方で、石田川左岸地域では、古墳時代初頭に廃絶すると考えられている北仰西海道遺跡とは対象的に、弥生時代後半からの遺物がみられる妙見山丘陵の東側に位置する福岡地区の遺跡群⁽¹²⁾は以降古墳時代を通じての居住域の存在が想定される。つまり、北仰西海道遺跡が沖積地にポツリと浮かんだ様に見えるという景観から、妙

図1 今津町周辺における古墳時代の遺跡分布

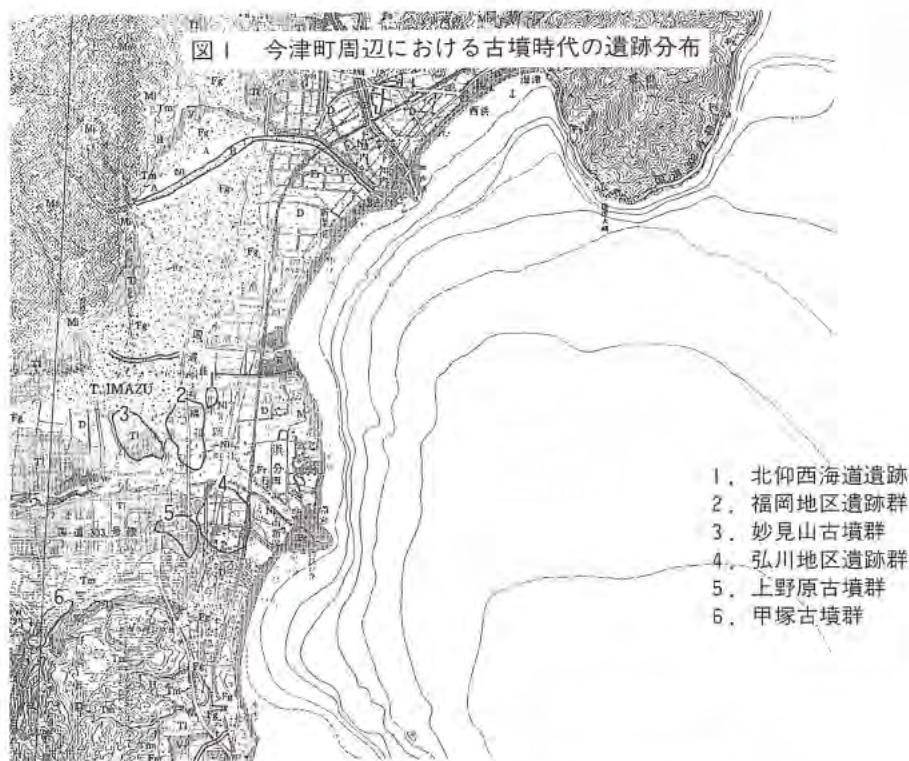


図2 今津町周辺における7世紀~9世紀の遺跡分布



見山丘陵の東側、つまり、石田川の取水口に近い位置（現在「井口」という地名が残っている）に集落を営むと換言できるだろう。主たる居住域の福岡地区と背後にある妙見山丘陵にある3世紀末以降の墓域である妙見山古墳群⁽¹³⁾との関係は極めて有機的なものであると考えることが出来、拡大的な解釈を加えるならば、点的に沖積地に可耕地を求めて分散していた弥生時代の居住域の在り方に対して、石田川の取水口近くに居住域を求めはじめた集団がいるという点においては、石田川左岸の水利権を掌握し、農業生産の統括を試みたものであると評価することが出来る。もっとも、古墳時代の点的な居住域は当然存在するであろうが、個々の居住域に接して墳墓が営まれた段階とは異なる動きであるという点での評価である点をつけ加えておきたい。こういった様相は、時期や規模こそ違え長浜平野や犬上川左岸の扇状地の状況のイメージと同様のものではないだろうか⁽¹⁴⁾。

また、こういった状況が一変するのが6世紀末以降の状況である。基本的には沖積地、中でも取水口近くに位置した集落の他に、かつて居住域、或いは農耕等には選ばれなかった地がこの時期になって活用されるのである。今津町内では中でも弘部野遺跡⁽¹⁵⁾、大供遺跡⁽¹⁶⁾、上野原遺跡⁽¹⁷⁾、弘川遺跡⁽¹⁸⁾、日置前遺跡⁽¹⁹⁾等のように扇状地扇央部、段丘上等に選地されている点が特徴的である。6世紀末～7世紀初頭にかけて弘部野遺跡や大供遺跡のように段丘上にみられる遺跡としては滋賀県内では新旭町美園遺跡の竪穴住居群⁽²⁰⁾、栗東町岡遺跡の竪穴住居群⁽²¹⁾、集落がみられ始めるという点では甲良町下之郷遺跡⁽²²⁾等がみられ、他地域においても京都府正道遺跡⁽²³⁾や大阪府吉市大溝⁽²⁴⁾が挙げられる。この様に突如として現れた集落がどの様な意味を持つのであろうか。1つの指摘として推古朝の池、溝の掘削や道路の整備などの国家的開発に連なるものであるとするものがある。この「国家的開発」というものが地域においてはどの様に表現されたのかについては弘部野遺跡や大供遺跡等の評価をふまえて検討するべきである。加えて新たな場に居住域を構成させた点から在地以外の「他者による編成」という点も指摘出来るだろう。

2. 生産遺跡の立地とその周辺

手工業生産については、今津町と新旭町の境に饗庭野古窯址群と呼称する須恵器生産地が見られ、その他鉄の生産地も散見する。須恵器生産地である饗庭野古窯址群は和泉陶邑古窯址群の田辺編年に対応させると6世紀末から7世紀初頭と考えられるTK209の段階にあたるものと高島郡内での初現とし、以降断絶期間は多少あると考えられるものの8世紀末から9世紀にかけての生産を行っている⁽²⁵⁾。饗庭野古窯址群の周辺には前段階の古墳時代の動向としては健速神社古墳群や木津古墳群等小数基からなる古墳群が散在するのみである。また、饗庭野丘陵南縁部の美園遺跡の竪穴住居群も6世紀末から7世紀前半の年代が与えられ、それに先行するものは現時点では見つかっていない。つまり、当該地が墓域としてではなく、集落・生産域として活用されるようになるのは6世紀末以降であるとすることができる。滋賀県下では饗庭野古窯址群と同様に多くの地域でTK209から生産を開始したと考えられており、この段階を迎えてほぼ汎滋賀県的な広がりを見せるようになる。また、この段階で生産を開始した古窯址群の特徴は、周辺に有力氏族の拠点を持たないこと、当初からある程度の範囲を領有し開発することを目的にしていると考えられること、ほぼ後の郡となるべき地域毎に存在すること、従来の（古墳時代までの）平野部の

開発が比較的遅れている地域の背後にある山に立地する例が多くみられることの4点である⁽²⁶⁾。ここでは詳細に論ずる余裕を持たないが、こういった現象は各地域での内的な成熟から起きたのではなく、どちらかといえば外力によってなされたものであると考えたい。この外力としたものが何を指すのかが最も問題になるが、ここでは国家或いはそれに準ずるものであるとしておきたい。つまり、滋賀県下でみられるような同一時期の須恵器生産の拡散とそれに連なる諸現象を、従来の有力氏族が構成する地域社会へ国家が直接、或いは間接的に干渉すべくクサビを打ち込んだものであると想定したい。

3. 墳墓の立地と変遷

今津町内での墳墓の立地とその変遷の画期についてふれてみたい。

弥生時代には点的に広がりを見せる集落に対して、北仰西海道遺跡⁽²⁷⁾に見られるようにそれぞれの墓域を持っているといえるだろう。しかし、前述したように石田川左岸に於いては石田川の取水口である福岡地区の背後にある妙見山丘陵に3世紀末以降古墳が築かれるようになり、状況は一変するといえる⁽²⁸⁾。これらの古墳群を観察すると最低2～3の支群を抽出することが出来るのである。また、石田川右岸に於いても上野原古墳群、甲塚古墳群が見られ同様の展開を見せて いるといえるだろう⁽²⁹⁾。その後の展開については5世紀前半に石田川左岸の妙見山古墳群に近接して湖西北部の盟主墳である王塚古墳⁽³⁰⁾が築かれる。6世紀後半になって高島郡内では後期群集墳の展開がみられるが今津町内（石田川流域）では顕著なものは見られず、前段階からの墓域を踏襲しているといえる。また、埋葬主体部は木棺直葬が主で、6世紀後半になっても横穴式石室の導入はみられない。

これらの状況は墓域、埋葬主体部とともに6世紀末～7世紀にかけて変化がみられる。石田川左岸では妙見山古墳群、王塚古墳群から箱館山南麓古墳群⁽³¹⁾へ、石田川右岸では甲塚古墳群から蘭生古墳群⁽³²⁾へと移動しており、埋葬主体部に関しても木棺直葬から横穴式石室へと変遷している。それ以降は明確な墳墓が確認されておらず8世紀代の墳墓の様相については明らかにし得ない。

以上、大雑把ではあるが石田川流域の墳墓の変遷について概観を試みた。これらの変遷の中でも可視的にも質的にも大きな画期を持っているのは6世紀末以降の段階であるといえる。ここでは集団構成に関して、何らかの変質があったものととらえておきたい。

4. 「ヒト」の動き、「モノ」の動き

今津町内を中心として「モノ」の在り方から他地域と高島郡との関係についてふれてみたい。

古墳時代の「モノ」の在り方として妙見山古墳群中のE-1号墳の埋葬主体部の構造⁽³³⁾についてとり上げたい。木棺の小口に石を積むという形態は、日本海側に見られるものであり、そういう地域との関係が指摘できるのである。しかし、ここに表現された日本海側の地域との関係は6世紀末以前まで見られるものの、横穴式石室の導入によって見えなくなるのである。

また、食膳具は9世紀後半以降に高島郡では日本海側の地域の影響を大きく受けたものになる。須恵器生産地である小猿山遺跡では双耳壺が出土しており、美園遺跡⁽³⁴⁾でも同様のものが見られる。また、日置前遺跡⁽³⁵⁾では北陸産と考えられる土師器甕が見られる。9世紀後半以降にも供膳

形態は北陸地方の影響を受けたものが定着している。食膳具の在り方は7～8世紀代においては土師器煮沸具では近江を規定するような「近江型」の長胴甕の流通、主たる供膳形態としての須恵器は地域内での生産がある程度確認されている現状では地域の中で完結しているといえる。

5. 遺跡の動態とその背景

以上、集落立地、手工業生産、墳墓の展開と消費物資の流通について高島郡内の今津町を中心とする地域の動向を概観した。

集落立地に関すると、弥生時代以降6世紀末以前には沖積地を中心に展開している傾向がみられるが、6世紀末から7世紀初頭にかけてそれまで集落域にならなかった扇状地・段丘上にも展開を見せるという点から土地条件の面で大きな差異がみられ、一つの画期があるといえる。これは、農業を中心と考えた場合の水利という点で「土地条件」に左右されているといえ、6世紀末以降はそれまでに手つかずの状態の山林・原野を穴埋めするようにそれまであまり用いなかった新たな手段（溜池・長距離水路・干拓など）によって活用（開発）していった時代であるといえるのではないだろうか。加えて、石田川流域では「人的編成」の表現手段としての古墳（墳墓の立地・埋葬主体部）の在り方と居住域の（他律的な）移動とが同様の時期に画期を求めるができるという点もまた重要であるといえる。

また、須恵器生産に関しても6世紀末から7世紀初頭にかけての時期に滋賀県レベルでの大きな画期がみられる。その動きは有力氏族が地域の支配者として存在し得た段階から、小地域への国家的なものの介入を想定させるものである。また、こういった生産は消費地での動向から9世紀代の中で須恵器生産は終息すると考えられる。加えて、消費物資の流通が地域の中ではほぼ完結している状況下では、他地域との関係が明確にみられない。ここでは、在地での生産そのものを行うという行為は旧来の流通関係に伴う諸々の権利の打破であると考えたい。つまり、こういった在地以外の他者が介入した時代を終えると旧来の関係（或いは新たな関係）を取り結び、行政区画である「郡」という地域を越えた流通を行っていくのである。

以上のように扇状地、或いは段丘上に出現した集落は10世紀を待たずに解体し、消費物資の流通も10世紀を待たずに他地域（北陸地方）との関係が濃厚となっていくものが多くみられる。つまり、6世紀末以降にみられた集落・生産・流通における従来とは異なる目新しさ（画期）は、中世という時代を迎えることが困難であったと考えられるのである。

註

- (1) 例えば掘立柱建物については柱痕跡・柱掘形から出土する土器により年代を導き出すことができるといわれるが、実際の調査例からは遺物が遺存していることはあまり多くなく必ずしも有効な手段とはいえない。また、掘立柱建物や竪穴住居、それを囲む柵、溝については同一方向のものを一つの遺跡内（発掘調査区内）でグルーピングし同一時期のものであるとするという方法が採られることが多いが、それが絶対的なものであるのかという検証と郡単位の広がりの中で画一的にとらえられるのかどうかという問題が残されている。加えて、建物構成を明らかにするためには全掘しなければならないという意見もでてこようが、群馬県黒井峯遺跡例の

ように地下に掘り込んだものの以外のものが如何に多いことであろうか。つまり、遺跡全体をあますこと無く発掘しても全てを復元することは不可能に近いのである。とはいっても、先学により試みられた建物跡へのアプローチの中で遺跡の立地や倉庫と認識し得る建物のあり方など目的意識によっては、極めて有効なものもあると考えられる。

- (2) 葛原秀雄「弘部野遺跡」第7・第8集(『今津町文化財調査報告』今津町教育委員会 1987・1988年)
- (3) 葛原秀雄「上弘部遺跡」(『今津町文化財調査報告』第9集 今津町教育委員会 1989年)
- (4) 田中勝弘『弘川遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1979年)
- (5) 葛原秀雄「北仰西海道遺跡の調査」(『今津町文化財調査報告』第7集 今津町教育委員会 1987年)
- (6) 葛原秀雄「日置前遺跡」(『今津町文化財調査報告』第2~5集 今津町教育委員会 1983~1986年)
- (7) 前掲註(5)
- (8) 葛原秀雄『今津町内分布調査報告書』(今津町教育委員会 1990年)
現時点では充分に発掘調査が行われていないことから明確なことはいえないが、分布調査のレベルで遺物の散布が確認され、発掘調査に於いても遺物の存在は確認されている。
- (9) 前掲註(8)・兼康保明『高田館遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1991年)等
弘川遺跡内でも石田川右岸の谷底平野の部分にあたる地点や弘川友定遺跡で弥生から古墳時代の居住域が確認されている。
- (10) 小竹森直子「近江における縄文時代晩期から弥生時代前・中期の遺跡立地に関しての一考察」
(『条痕文系土器文化をめぐる諸問題』愛知考古学談話会 1988年)
- (11) 前掲註(8)
- (12) 前掲註(8)
- (13) 横田洋三『妙見山遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1990年)
- (14) 長浜平野は東を臥竜山に遮られ、北は姉川の本流を境とする。しかし、臥竜山からは安定した水量は求められず、姉川本流からは直接の灌漑用水を求めるることは出来なかったと考えられる。そこで、姉川と臥竜山に挟まれた地が唯一の取水口となった。その地には前方後円墳である竜ヶ鼻古墳、山の鼻古墳、茶臼山古墳が築かれ重要な地であったことがうかがわれる。(丸山竜平「前期古墳のいろいろ」『古代を考える 近江』吉川弘文館 1992年)
犬上川左岸の扇状地は、扇状地上の開発が遅れ扇央部では弥生時代前期の土器が若干見られるのみで、その後は地下に痕跡を残すような人間の営みはほとんど確認されていない。しかし、犬上川が平野部にそそぎ込む位置にあり現在の取水口でもある一の井堰付近から檜崎古墳等6世紀後半以降の古墳が数多くみられ7世紀代には扇央部に於いても集落域や灌漑水路が確認され開発が行われたことを物語っている。おそらくは現在の一の井堰付近を起点として開発が行われたと考えられている。(横田洋三「古代人の生活と水」『湖の国の歴史を読む』新人物往来

社 1992)

(15) 前掲註(2)

縄文時代以降地下に痕跡を残す土地利用が行われなかつた地として弘部野遺跡は挙げることが出来る。当初は竪穴住居を中心とする構成を持つが、以降掘立柱建物と共存或いはそれのみの構成となると見られる。旧若狭街道のルート上に位置するが弘部野遺跡との関係について検討する必要がある。

(16) 葛原秀雄「大供遺跡」(『今津町文化財調査報告』第2・3集 今津町教育委員会 1983・84年)

(17) 葛原秀雄『上野原遺跡発掘調査概要報告書』(今津町教育委員会 1988年)

(18) 前掲註(4)

(19) 前掲註(6)

(20) 林博通ほか『美園遺跡発掘調査報告』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1975年)

(21) 松村浩ほか『岡遺跡発掘調査報告書』(栗東町教育委員会・栗東町体育文化振興事業団 1990年)

(22) 宮崎幹也『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XI V-2』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1987年ほか)

(23) 近藤義行ほか『正道官衙遺跡』(城陽市教育委員会 1993年)

(24) 広瀬和雄「河内古市大溝の年代とその意義」(『考古学研究』第29巻第4号 1983年)

(25) 畑中英二「6世紀と7世紀・須恵器生産における質的問題」(『滋賀考古』第10号 滋賀考古学研究会 1993年)

(26) この点については拙稿に於いても既にふれているが、「滋賀県下に於ける律令期須恵器生産の動向に関する検討」(『紀要』第2号 安土城考古博物館 1994年)に掲載予定である。

(27) 前掲註(5)

(28) 前掲註(13)

(29) 前掲註(8)

(30) 葛原秀雄「王塚古墳の調査」(『今津町文化財調査報告書』第7集 今津町教育委員会 1987年)

(31) 前掲註(8)分布調査の成果から酒波東古墳群、酒波神社古墳群等各数基からなる古墳群が形成されていると確認されているが、何れも6世紀末以降の所産であると考えられ、それぞれの古墳群とされているものを1つの支群として考え、これらを総称してここでは箱館山南麓古墳群と呼称する。

(32) 前掲註(8)分布調査の成果と発掘調査から得られる埋没古墳の存在が想定されることから個々の古墳として取り扱うのではなく、ここでも蘭生古墳群として総称しておきたい。

(33) 葛原秀雄「日置前遺跡発掘調査概要」(『今津町文化財調査報告』第3集 今津町教育委員会 1984年)

(34) 前掲註(20)

(35) 前掲註(6)

編集後記

今年度は雨が多く冷夏であり、どの現場もいたずらに排水作業を繰り返し時間に追われて苦悩の日々を過されたことと思います。本紀要も、第7号を迎えるにあたり、本号には予想を越える14編の論考を掲載することができました。調査に追われながらも、日頃の各自の問題意識と研鑽の結果であるといえるでしょう。本号が「近江」や「文化財」への理解の一助となり、読者の方々からの御指導、御鞭撻が賜れれば幸いです。

